

近世職人尽絵の特徴および系譜に関する考察

—喜多院所蔵「職人尽絵屏風」を中心として—

奈良 葉子(京都工芸繊維大学大学院)

本発表は、喜多院（埼玉県）所蔵の狩野吉信筆「職人尽絵屏風」（以下喜多院本）の特徴を通じて、近世初期に制作された職人尽絵の絵画史的な位置付けを、系譜および類型という2つの観点から明らかにするものである。職人尽絵は鎌倉から室町時代にかけて制作された職人歌合の伝統に連なるものとされ、他方では、桃山から江戸初期にかけて花開いた近世風俗画の一ジャンルと位置付けられてきた。つまり、職人尽絵の考察には、①歌合からの系譜の問題、②風俗画の中の位置付けの問題、という2つの論点を考える必要がある。これまでの喜多院本を始めとする近世初期職人尽絵の研究では、職人歌合と同様の職種が洛中洛外図にも登場することが指摘され、歌合から一度洛中洛外図に取り込まれた職人図像が再度切り離されるという過程を経て成立した、という議論が行われてきた。この中では、職人尽絵の風俗画としての側面のみが重視されているきらいがあり、また、近世職人尽絵の中での類型整理が不十分で、異なる特徴を持つ各作品をひとつの議論の中に入れてしまっている。洛中洛外図が近世職人尽絵に少なからず影響を持つことは否めないが、他方で、洛中洛外図を喜多院本の母胎と位置付けられるか否かは、以下のような理由から再考する必要がある。

すなわち、同時期に描かれた他の職人尽絵との比較において喜多院本の特徴を考察すると、職種を手工業者に限定する点、描写対象を職人とその周辺に特定し、環境描写を排除する点等が指摘できる。これらが示唆するのは、近世初期の職人尽絵には、①職人を単体として描き出そうとするもの、②都市の情景を表現する主要モチーフとして職人を描くもの、という2類型があり、その中で喜多院本は①に当たるということである。

そのような性格を持った絵画として喜多院本をとらえると、洛中洛外図の一部をクローズアップさせた絵画というより、職人歌合から直接繋がる、職人自身に関心の対象としてとらえ、個別的・並列的に描写してきた流れが継承されていると考えるべきである。他の風俗画と比較すると職人尽絵には押絵貼形式をとるものが多い点、歌合の図様の多くが喜多院本と同様の押絵貼式の職人絵に転用されている点でも、職人歌合が直接の原型であったことを確認できる。

同時代を描写するという点において喜多院本職人尽絵が風俗画的な性格を持つことは否めず、また、京都を中心とした武家・町衆文化の隆盛の中で盛んに制作された点でも、風俗画と職人尽絵は背景を共有する。しかしながら、その中でも特に職人の持つ技術力が京都の経済発展の基盤となっていたという歴史的な事情を踏まえて考えれば、単に都市を彩るイメージという以上に、職人そのものが関心の対象となり、描写される作品が多く制作されたのであるといえる。すなわち、喜多院本は洛中洛外図を母胎とするものではなく、職人への関心が高まりとともに、中世の伝統的職人歌合から和歌が切り離され、風俗描写を取り込みながら、職人図像を個別並列的に配置するようになったという過程を経て誕生したものである。